感染症診療の最前線2015（Ⅵ）

水痘（ワクチンも）

東京都立小児総合医療センター感染症科医長
堀　越　裕　歩
（聞き手　大西　真）

大西　堀越先生、水痘についてうかがいます。まず、日本の現状といいますか、疫学的なことから少し教えていただけますか。

堀越　水痘は小児に非常に多い疾患で、推定で年間100万人ぐらいが罹患しているといわれている疾患です。つい最近、ワクチンが適用されたことで少し減ってきているとはいわれていますけれども、まだまだ小児科が非常によく遭遇する疾患です。

大西　次に病気のことをうかがいたいのですけれども、典型的にはどのような経過をたどるのでしょうか。

堀越　水痘は空気感染で、水痘の患者さんと接触すると、ウイルスが口腔粘膜などから入って、だいたい10～21日間の潜伏期間を経て、体にポツポツと発疹が出てきます。発疹は全身どこにでも出て、典型的だと髪の毛の中とか、全身にわっと広がってきます。発疹は水を持つのが一つの特徴でして、それがやがてかさぶた化して、乾いてくるとだいたい病気が終わるという経過になります。

大西　かさぶたができると、学校などに行ってもよいのでしょうか。

堀越　全部かさぶた化すると感染性がなくなったとして、登校を許可することができます。

大西　時々合併症などもあると聞いていますけれども、どのようなものがあるのでしょうか。

堀越　ほとんどの場合は軽く済んで、問題のない疾患群ですけれども、合併症は決して少なくありません。この水痘のウイルス自体、非常に神経を好むウイルスで、特に子どもで多いのは小脳炎で、ふらつきであったりとか、脱水症状が出てきたりとか、そういったことに比較的よく遭遇します。

大西　そういう場合の予後といいますか、かなりの部分は自然に治るのでしょうか。

堀越　脳炎を起こしても、免疫が正常な場合には多くの場合は回復するといわれています。ただ、中には重症水痘を伴って、年間でだいたい20人くら

いの方が亡くなっているといわれています。いわゆるワクチンで予防できる麻疹、風疹、水痘、おたふく風邪の中では、実は水痘が一番致死の高い疾患になります。

大西　そういう場合は対症療法的に対処するのでしょうか。

堀越　水痘に罹患した場合は、アシクロビルという抗ウイルス薬がありますので、これを使うのですけれども、ウイルスの増殖を抑えるような薬でして、たちどころに効くような薬ではありません。薬としてもやや切れが悪いというか、なかったころに比べたら予後は非常によくなっているのですけれども、やはりワクチンで予防するのが一番大事な疾患になります。

大西　大抵の場合はそういった薬は使わないで、自然経過というかたちですか。

堀越　そうですね。ほとんどの水痘の場合は自然経過で治ります。特にアトピーとかでステロイドを使っているとか、そういったリスクがなければ、基本的には自然経過で軽快します。アシクロビルを使っても、発疹の数が少なく済むぐらいのもので、メリットが少ない。特に軽症の水痘に関しては、抗ウイルス薬の位置づけはあまり高くないと思います。

大西　成人になって罹患すると重いといわれますが、そのあたりはどうでしょうか。

堀越　成人の場合にはけっこう重症化します。水痘肺炎といって、かなり重症な肺炎を起こしたりします。実は水痘ウイルスで亡くなっている方のかなりの部分が成人です。特にこれからワクチンが普及してきて流行が減ってくると、自然罹患しないまま、かつワクチンを打たないでいると、水痘ウイルスに対して感受性があるまま大人になって、いざ暴露してかかると、重症化する危険性があるというのが、危惧されているところです。

大西　いろいろな病気をお持ちの方で気をつけなければいけない病態などありますか。

堀越　特に免疫不全の方、血液腫瘍系の疾患とか、がん、あるいは腎臓とかの病気でステロイドをのんでいるなど、そういった方は重症化する危険性があります。特に出血性の水痘症といって、劇症型の水痘症になると、瞬く間に死んでしまいます。これは治療する間もなく、あっという間に死に至る疾患で、やはり予防するのが一番かなと思います。

大西　先ほどからいろいろワクチンの話が出ていますけれども、今のワクチンの考え方などワクチンそのものについては、だいぶ新しくなってきたのでしょうか。

堀越　ワクチン自体、実は日本人の高橋先生という方が世界に先駆けて開発されたのですが、残念ながら日本は

定期接種化が非常に遅れて、つい2014年、やっと定期接種で、経済的な負担がなく子どもたちに接種できるようになりました。

１歳を超えたら、麻疹とか風疹とかおたふく風邪のワクチンと一緒に１回目を接種して、海外と若干接種の仕方が違うのですが、２歳までに２回目を接種するのが推奨されています。これはまだまだ水痘が非常に流行しているので、２回目の接種まであまり期間が空いていると、１回の接種でも90％ぐらいは効果があるのですけれども、２回目の接種を待っている間にかかってしまう可能性があるので、比較的早めに２回目を打つことが推奨されています。

大西　有効率は確認されているのでしょうか。

堀越　水痘のワクチンは非常に安全で、２回接種したら、98～99％ぐらいの効果が期待できるワクチンです。非常に有効なワクチンで、副反応もだいたい接種してから１週間ちょっとぐらいで微熱が出たり、あるいは非常に軽い発疹が出たりするのですけれども、ほとんどの場合が数日で自然によくなります。自然に水痘にかかるのに比べたら全然軽く済む合併症です。

大西　定期接種は2014年からということですので、若い世代で抵抗力がないといいますか、抗体がない方はけっこう多いのでしょうか。

堀越　定期接種の対象者が今のところ５歳未満とか小さい子だけですので、小学校に上がってしまって打たないでかからないで来てしまった人はちょっと危惧されるところです。罹患歴がなくて、接種歴もない場合は、小学生、中学生、もちろん高校生、大人でも、ワクチンを接種しておいたほうがいい。大きくなってかかると、のちのち非常に重症化しますので、接種をお勧めします。

大西　医療従事者もきちんと抗体を検査して、打つようにといわれますね。

堀越　日本環境感染学会という、ICTの学会から推奨されていて、基本は水痘のワクチンを２回、しっかり接種しておくというのが重要です。もしその接種歴がわからないのであれば、抗体価をチェックして、しっかり抗体があるのを確認することが勧められています。

大西　次に関連する疾患として帯状疱疹についてうかがいたいのですが、これも今、かなり高齢の方とか、患者さんがけっこう多いように思うのですけれども。

堀越　帯状疱疹に関しても、ある一定の年齢になったら、ほとんどの人がなる疾患だと思っていただいていいと思います。今、高齢の方のほとんどが、子どものころにかかったウイルスが終生、ずっと潜んでいます。大きくなって、高齢とともに免疫が少し落ちてき

たところでウイルスが悪さをします。高齢者の帯状疱疹は、なったあとも痛みが何カ月も続いたりとか、非常に不愉快な疾患ですので、子どものうちにしっかりワクチン予防しておけば、帯状疱疹にならないで済むという意味では、非常に大きいと思います。

大西　特に痛みがひどい患者さんに関しては、対処法は進歩しているのでしょうか。

堀越　実はあまりなくて、たくさんの患者さんが帯状疱疹に関して苦しんでおられると思います。ただ、帯状疱疹に対してもワクチンが出てきていて、日本ではまだ認可されていないのですけれども、実はこれは水痘、子どもにうつるものとほとんど同じものを使うのですけれども、海外などでは免疫を刺激することによって帯状疱疹の発症を抑えるワクチンができて、将来的には日本でもこういったものが導入される可能性はあるかと思います。

大西　帯状疱疹にかかる方は、何回もかかる方もいらっしゃいますね。その辺は何かきっかけといいますか、体のほうの要因が何かあるのでしょうか。

堀越　特にT細胞系の細胞性免疫が重要といわれていますので、免疫能が落ちてくると、どうしても何回もかかることはあるかと思います。

大西　何かトリガーといいますか、誘因のようなものははっきりしないのですか。非常に過労だったとか、何か持病があるとか。

堀越　免疫が落ちるような持病があったりすると、特に血液腫瘍系の病気とか、がんとか、抗がん剤などで治療をして抵抗力が落ちると、当然ながらなりやすくなりますが、もう一つ、小児領域でいわれているのは、１歳未満で水疱瘡にかかると、小児期に比較的重い帯状疱疹をきたすことが知られています。１歳未満はまだワクチンが打てない世代ですので、コミュニティでしっかりワクチンを打って流行させないことで、１歳未満の赤ちゃんたちが水痘にかからないようにしてあげるのが大事かなと思います。

大西　どうもありがとうございました。